



ここにも「道」あり  
一服しませんか

藤屋 侃士  
（下松市幸ヶ丘）

358

たよね」と妻に尋ねると「あなたのお母さん

が伯母さんが亡くなられた時もらったものを私にくださったの。伯母さんが大切なお茶会などの時、使用されたそうだけど、もらった時、箱が見つからなかったそうよ」と。妻は茶わんが包んであった布が汚いので洗濯したが、きれいにならなかつたので捨てたという。猫に小判とはこんなことを言うのだ

本紙月曜に連載している「走れ！おばさん」の中村光子さんから、周南市美術館博物館の「茶の風景」に行きませんかとお誘いを受けました。

最終日の前日の二十日、早川さんが抹茶の接待をするからという。早川さんは二カ月に一度、小料理屋で開いている句会のメンバーで、私と同じ下松に住む。車で参加されるので酒は飲まず、句会



「茶の風景」の会場

ろう。聞くところによると、茶わん同様に包んであった布や箱も大切なものらしい。

私の伯母は裁判官と結婚、ご主人が亡くなったあとは女子大で教えるかたわら、お茶の師匠をしていた。子供に恵まれず、私に「伯父さんの跡を継いで裁判官か弁護士になつて」と言っていた。大



クロス紋の説明をする早川さん

学受験の際、中央大学法学部を受験したが、結果的には法曹違いの放送局で働くことになった。

話が横道にそれたが、そんな伯母の遺品だから、ひよっとすると多少価値があるものかもしれない。会場での抹茶席で使われた茶わんは教会にも多少関係がある唐津



茶席に生けてあった花も趣があった

焼にクロス紋（十字架の模様）。妻は黒染はもう一つ一回り小さいものもあると言いながら、関心はクロス紋の茶わんにあるらしい。そう言えばカトリックのミサの作法とお茶の作法には共通性があると聞いたことがあ

茶道、華道、柔道、剣道など日本古来の「道」がつくものの奥行の深さに気づく。掛け軸には「一味」と書かれている。私にはうどんを食べる時の香辛料しか連想できない。句友の早川氏は和服姿が実によく似合う。それだから私よりはるかに良い句ができるのだと変なところで納得する。

何か全く無縁だったお茶の世界が急に身近に感じられる。茶席に生けてある花も掛け軸も趣がある。家を建てた時、大工に床の間のない家を建てるのかと叱られたことを思い出す。

七十を過ぎてても何も知らない自分に多少情けなきを感じはしたが、しかし心豊かにしてくれた「茶の風景」であった。次の句会のためにステテコではなく、せめて甚平で句を考えようと思った。